

先馨秋籬空訝梁園雪曉岸忽疑穎水星還咲蘆花千片白更嘲松樹一株青風飄紫艷爭仙佳月照濃粧混瑞雲麗谷酌流猶却老陶家羞酒未知醒叢端移座偷爲祝萬歲榮華契此亭

〔千載和歌集五〕法性寺入道前太政大臣内大臣に侍るとき家の歌合に殘菊をよめる、

藤原基俊

けさ見ればさながら霜をいたゞきておきなさび行しら菊のはな

〔早霖集〕五月菊 井序

昔人題五月菊詩有爲嫌陶今醉來伴屈原醒之句余愛其雅而當矣而此花開多在六七月豈土氣候而爾邪將非居移氣者與余常恨其名實不副而見花之晚也耳今茲五月盛開因輒申二句作八句詩以遣舊恨云、

眼與南山不改青忽看惡月產英靈黃花整困黃梅源重午新聞重九馨雖醉誰如陶今醉縱醒何似屈醒爲陶右袒爲屈左二老風流在一庭

〔笈埃隨筆八〕雜說八十ヶ條

中世今出川家の西京別莊に數品の菊あり故に菊亭と叡聞に達し御車を此に枉給ひぬ實季卿有難く感悅の餘り悉く掘て禁園に奉らる依て是より以來當家に菊を植す

〔年々隨筆二〕から國にては菊は黃なるをめぐめり詩どもにも黃菊黃花などぞきこゆる皇國には置まどはせると霜によそへしよりはじめてまろきをむねといひならはしたりまことに手をつくしたるくさくさの色よりも白菊黃菊のいたく大ならず又小くもあらぬをわざとつくろひなどもせでさかせたる此園の中などそこの松影に匂ひみちたるこそをかしけれそがきくとは黃菊のことなりといふさる事にや何がしかかやきこえし連歌師の句に黃菊白ぎくその外の名はなくもがなさる事也